

1. そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。(5:19-20)
 - a. イエスが安息日にいやしを行った理由は少なくとも2つある。1つは、イエスは宗教指導者たちと同じルールには従っていなかったし、彼らから何と言われようと気にしてはいなかった(イエスは自分で自分を偉いと思っているような人たちから称賛されようとしていなかった)。2つ目には、イエスは父がしておられることを見て行う以外のことは何もしていなかった。イエスの生き方は完全に神に従う人生であった。
 - b. イエスの人生は完全に神に従うものだった。自分で好きなことをする人生ではない。見る目、聞く耳、理解する心を持ち合わせていた。イエスの生き方はつねに神のみこころを求め行い忍耐をもって待ち望んでいた。イエスの人生の目的はただ一つ、神に栄光を帰し、神から栄光をいただくことであった。
 - c. 神はイエスを愛し信頼していたのでさらに大きな啓示を与えられた。私たちも、誰かからより愛され信頼される時より多くのもを見せてもらえる。これは人間も神も似ている性質である。神からより信頼され愛されると、よりすばらしい、親密な神秘が示される。
2. 父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。(5:21)
 - a. イエスは、いのちをお与えになるのはイエスご自身と父なる神のみであることを明確にする。まだ存在していないいのちだけではなく死んだ者にもいのちを与えることができる。イエスは、私たちの内で死んだもの、またサタンが殺したものにもいのちを与えることができる。
 - b. イエスがいのちを与えてくださるのは必ずしも私たちが受けるにふさわしいからではなく、ただイエスの御心による。イエスは知恵によっていのちを与えてくださる。それは私たちのではなくイエスのご意思なのである。(しかしイエスが父なる神と完全に一致しているように、イエスの弟子である私たちも同じようであるべき。)
3. また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。(5:22-23)
 - a. イエスがお持ちの力と権威はいのちを与えるだけでなくいのちを取ることでもできる。ここでのさばきは2コリント 5:1-10に見られるような、いのちの終わりに聖徒が報酬を受けるようなものとは違う。
 - b. イエスにはすべての者から特別に敬われるために、さばきを行う力と権威が与えられている。この時点ではこれが何を意味しているのかわかりにくいですが、イエスは神と同じ光の中で敬われているのではない。あなたはイエスを敬っているだろうか? 友達に対しての敬い、さばき主に対しての敬いがある。最も大きな栄誉はイエスに向けられるべきである。
 - c. 私たちがイエスに向ける敬いは父なる神を敬うことと直接関係している。敬うことは御国に生きる時に重要な側面である。神が行うこと、また誰を通して行っているかということに敬うことが、神ご自身を敬うことになる。私たちの生き方が神に栄光を帰すことであるなら、神がどのような形で、また誰を通して御心を行うかということは問題ではない。
4. まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。(5:24)
 - a. イエスは永遠のいのちの神秘を少し明らかにされている。永遠のいのちには少なくとも3つの要素がある。まず神のさばきをまぬがれる、次に死をまぬがれる、そしていのちに移る。
 - b. 永遠のいのちはイエスのことばを聞く生活からなる。イエスとのコミュニケーションがなかったら永遠のいのちに至ることはできない。人の子が父なる神の言動をそのまま行ったように、私たちもイエスを通して同じことができるようになる。イエスのことばを聞くだけでなく、神を信じ信頼することができる。
 - c. あなたは永遠のいのちに満たされて生きていますか? その問いの答えは「どこに栄光を求めていますか?」という質問によっても明らかになる。あなたが求める栄光が、あなたが仕える神を現すからである。父なる神からの栄光を求め、神に栄光を帰す時、永遠のいのちにあふれて生きてることが確信できる。